

「やりたい」夢 支えるプロ

地域医療の最前線で 5

現場へ！

先方は「出演依頼」をしていただというが、こちらの心の準備はゼロだった。

私(55)が「研修生」として1年を過ごした社会医療法人関愛

会(大分市)では、坂ノ市病院

にあるデイケア施設で住民らに運動教室を開いてきた。しかし、コロナ禍で開催できなくなり、「オリジナル健康体操」と銘打った動画配信をしていた。

ある時、「収録の模様を取材して」と声がかかった。そのつもりで公民館の一室に出向くと、何がなんだか分からないまま、アフロヘアのカツラをかぶらされ、バランスボールで運動することに。2日後にはその様

子が動画で配信されていた。

一連の模様を撮影し、手際よく編集したのが、関愛会が「もみの木」という名のブランドで展開するデイケアの部長、川野剛士(49)。地域との関係づくりを専門とする認定理学療法士である。私の「大分暮らし」を楽しくしてくれた人物だ。

「足をくねくねマッサージし

てるだけじゃダメなんですよ」。そう熱く語る川野のリハビリ信条は「あなたの『したい』を応援したい」である。

大学を卒業後、食品関係の会社で8年間働いた後、3年かけて理学療法士になった。最初に就職した介護施設での仕事は、1回20分のマッサージを20人ほどに施すこと。「週に1回程度マッサージを受けて何の意味がある?」という疑問が湧いた。

15年前に関愛会へ転職。利用者の自宅と通所施設の間の送迎を行ううちに、高齢の利用者たちが「生活できていない」と感じるようになった。特に男性。家に引きこもって、ご飯を食べるだけ。「何のために関節の可動域を広げているのか。リハビリには生きる目標が必要だ」

「もみの木の伝説」として語り継がれるのは「イルカに乗った元校長先生」だ。2010年に81歳でデイケア利用を始めた男性は、ほぼ横になって過ごし、外を歩くことも拒んだ。

だが、2年近くかけて「桜の下で写真を撮る」という目標を実現。その後に胃を切除する大手術を経て、数十年ぶりの海水浴へ。13年に「イルカに乗る」夢もかなえた。

「レジャー施設で『絶対にやりたい』と言いだしたので、す

ぐ家族に連絡して、リハビリ用パンツの上からウェットスーツを着るのを手伝ったんです」と川野は振り返る。

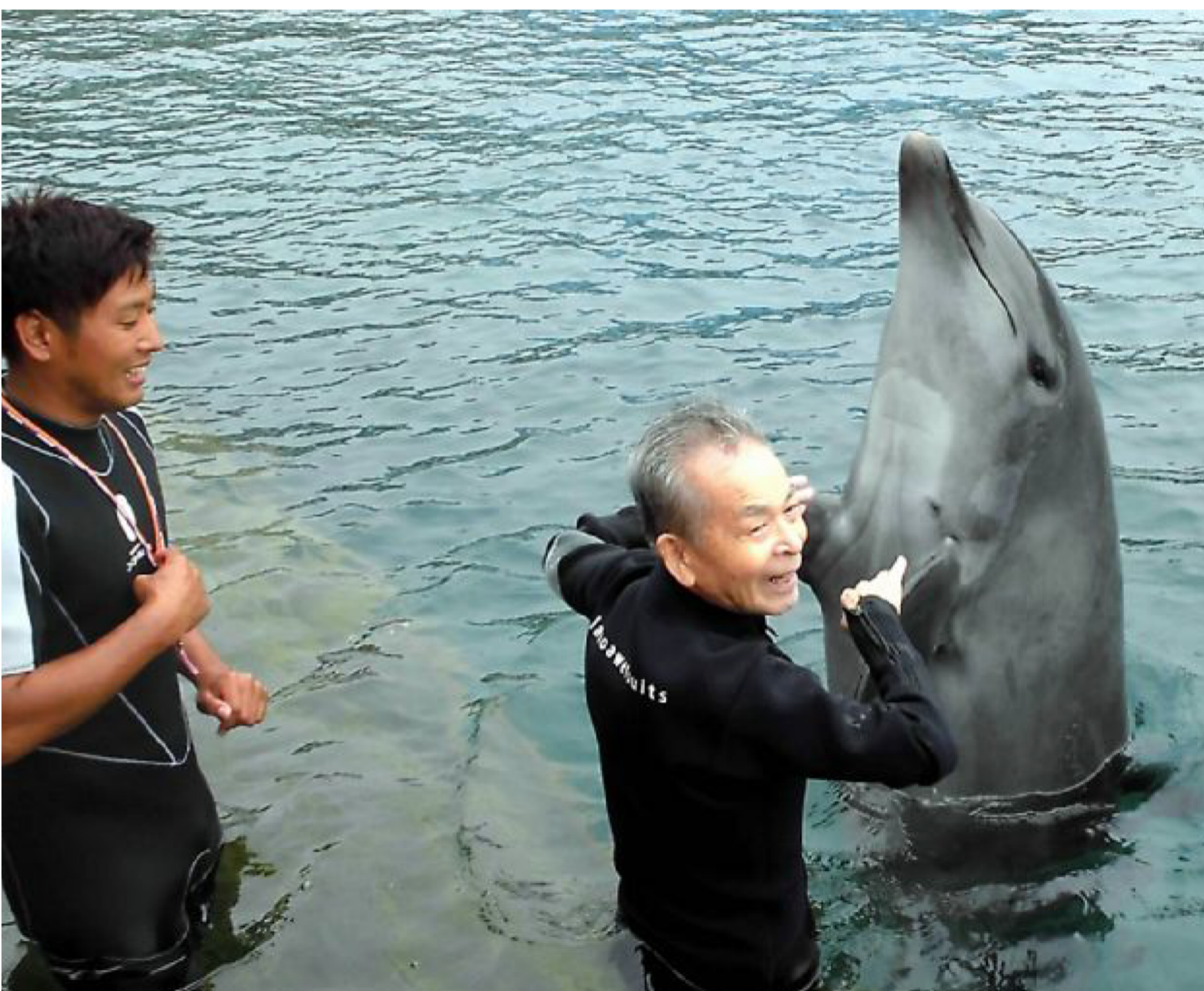
「生活のためのリハビリから一歩進んで、生きがいのためのリハビリが非常にうまく実現したケース」。デイケアの管理者で関愛会の創設メンバーの一人、甲原芳範(58)は言う。

好きなことをする時、人間の表情はこうも変わるのか。昨年10月、「もみの木」の利用者が釣りに出かけるのに同行した時のことだ。

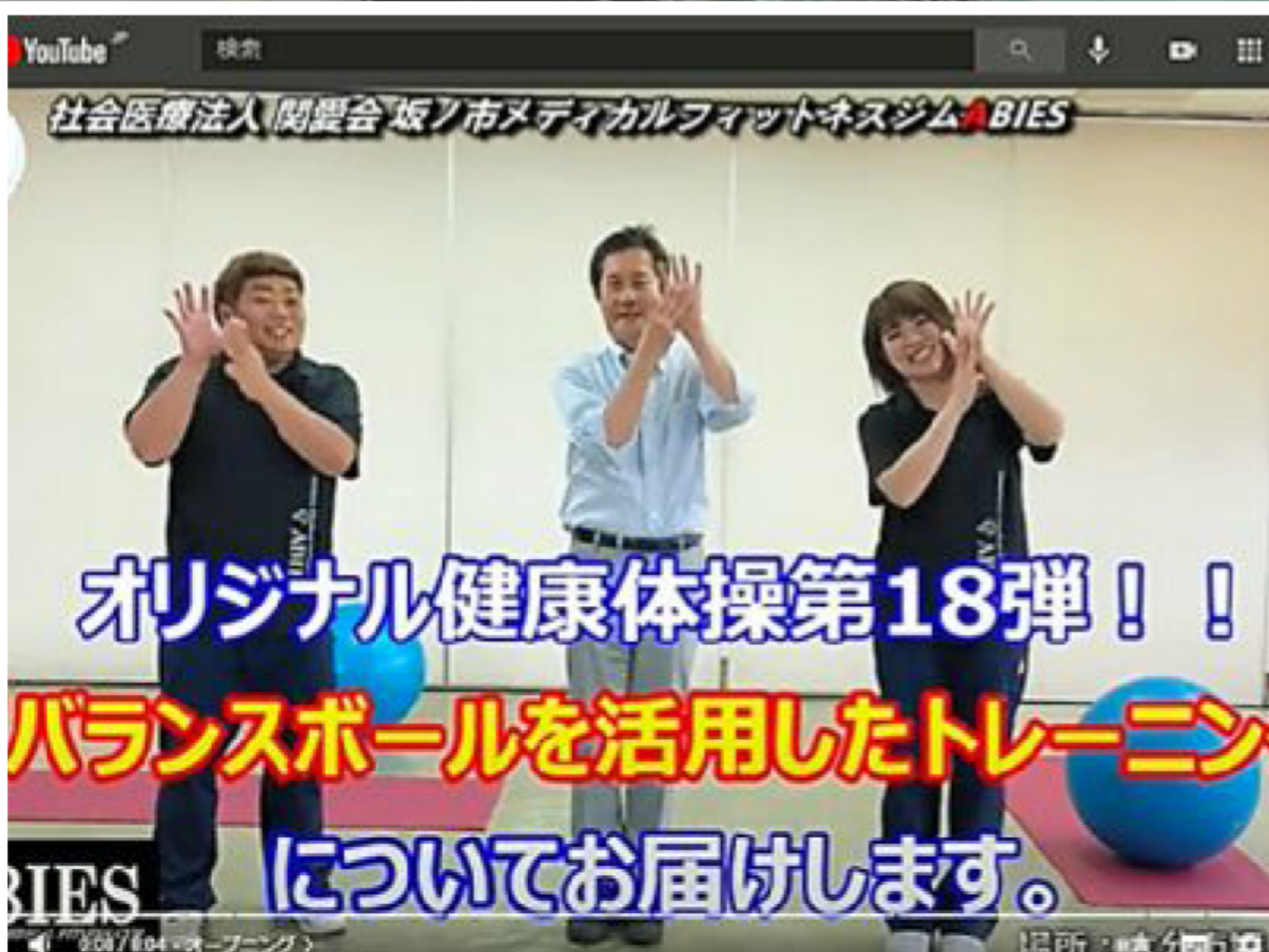
その男性(75)は、進行性の病気で、自宅では寝て過ごすことが多かった。ケアマネジャーは「釣りならやってもいい」という声を拾い上げる。釣りが趣味の介護職が男性と会話をしながら男性の意欲をかき立てる。理学療法士が必要な身体能力を回復させる。そんな連携を積み重ね、男性はついに車いすの上から釣りざおを握ったのだ。

20年後、自分は生きる目標を持てているか。それを支えてくれる医療や介護のプロたちは周りにいるだろうか。そんなことを考えた。 敬称略(おわり)

(浜田陽太郎)



「つくみイルカ島」でイルカと泳いだ男性は2年前まで屋外歩行も拒んでいた。2013年9月、大分県津久見市、関愛会提供



よく分からないまま動画出演を果たした記者(中央)



理学療法士の川野剛士